

かわらばん

## 妻入り

事務局

新潟県出雲崎町

教育委員会

☎0258-78-2250

FAX 78-4559

## 時速10kmの町づくり

「時速10kmの町づくり」をテーマに研究を行っている長岡造形大学の研究報告会が行われました。報告会の概要は、次のとおりです。

江戸幕府の直轄地だった出雲崎町は、佐渡の金銀の陸揚げ港、北前船の寄港地、また北国街道の起点として、この地方一帯の政治・経済・交通・文化の中心となっていた。良寛がこの地に生まれ、芭蕉が訪れて「天の河（あまのがわ）」の名句を残し、十返舎一九、吉田松陰など多くの文人墨客が往来した。

絶壁の山と日本海に挟まれた地理的条件、間口の大きさと税額が決

められていたという江戸の社会的条件が基になり、全国に類を見ない貴重な妻入りの街並が形成されており、延長3.6kmにも及ぶ街並は

地域住民の親密なコミュニティと共に現在まで生き続けており、北国街道の風情を偲ぶことができる景観を形成している。しかし、このように由緒ある出雲崎町は、高齢化・過疎化にみまわれ、このままの状態では、歴史的遺産である町が消滅に向かうという危機感がある。今後ともこの街並を中心とする出雲崎町の環境は、北陸地域における文化的価値、新事業の創出、観光資源と

しての活用等々、様々な分野から注目されるべき資源である。

このような町に「元気を取り戻す」ことが本研究の課題である。空き家が目立つようになった800軒の住宅（江戸期・昭和期）を甦らせ、心に残るような良寛のふるさとをつくること。また、高齢期を迎えた住民が地域のコミュニティの中で安心に暮らせるような町をめざすこと、多くの人々が生活できる基盤をつくること、そして、海や町や生活に魅力を感じて若い人々が戻ってくることを求めている。

本研究は、高齢者が生き生きと動き回っている町を実現すること、住民にそういった町の姿を浸透させる試みで、将来的には、住民自らで電動カートの貸し出し等の運営を行うことが目標である。

この目標の達成にあたって、次のような問題点が挙げられる。

○まちづくりの仕掛け人、主体となる住民のほとんどが高齢者である点

○まちづくりに関し、様々なアイデアを実現する際の事業費を捻出する手段が、その主体が高齢者であることも踏まえ、非常に限られてくる点等

このような現状から実験、研究のキーワードとして、高齢者自立、福祉サービス、街並の魅力、雇用の創出を挙げて今回は最終目的に至るまでの初期実験として電動カート配置実験を行った。最終の目的としては以下の点を挙げる。

(一)「高齢者の生活者がいきいきとすること」

高齢者の第二の足を確保し、高齢者が町中をいきいきと移動できるように安全と安心を確保することが必要である。徒歩に不自由を感じる高齢者が、積極的に町に出て用事をたすことができるようにすること。

(二)「観光客が街並の魅力を感じるができること」

電動カートの時速6kmで街並を移動する空間は、車で通過すること

では味わえない連続する街並の景観や路地裏の魅力を再認識することが出来る。そこに住む住民はもちろん、そこを訪れた観光客にとっても、深く郷愁を感じ、感動できる空間的演出ができるようにすること。

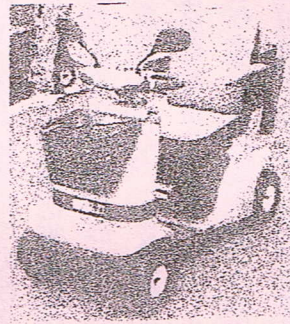
(三)「雇用の創出が生活者にうるおいをもたらすこと」

電動カートを導入することにより利用料を得ることができれば、各町内で運営拠点を設営し、雇用創出が確保される可能性がある。その際、高齢者自らそれを担当することも考えられる。

このようなことから、この電動カートの配置実験により、出雲崎町のもつ街並を活かし、電動カートを住民の共有財産として管理運営を行いながら、その試みから発生する諸問題を分析し、問題点を解決しながら、住民主体によるまちづくりの可能性について検証をしてみたいと思う。

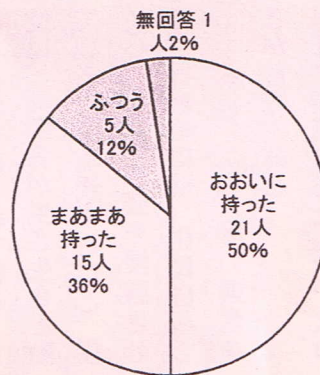
電動カート利用実験は、協議会に長岡造形大学から寄贈された三輪

と四輪のものを利用する。その他に五輪自転車、三輪自転車を利用する。実験は、二段階に分けて行う予定である。第一段階は、各町内への利用普及、講習会とアンケート調査。第二段階は、料金を設定しての貸し出し実験とアンケート調査である。

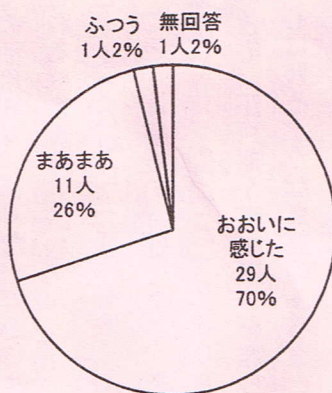


第一段階の実験は、昨年夏に海岸地区三カ所を会場として試乗会（操作講習会）を開催した。最初は、操作に不慣れであったようだが、運転に次第に慣れてくると、お互いが教えあつて電動カートを楽しく試乗していた。会場にきてくださった方々に対し、電動カート試乗後にアンケートを行った。結果は以下のとおりです。

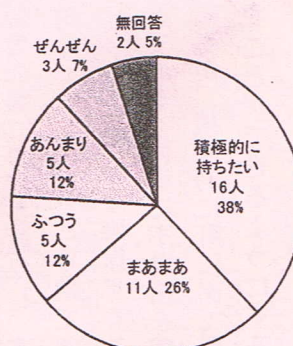
① あなたは、電動カートに興味を持ちましたか？



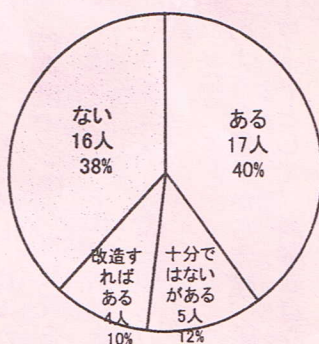
② 電動カートを使いこなせたら、便利な乗り物だと思いますか？



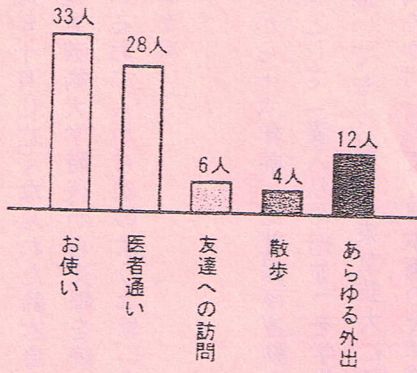
③ 将来電動カートを自分で持たいたいとお考えですか？



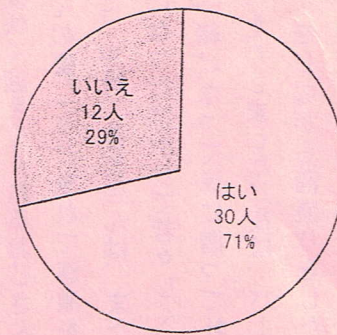
④ あなたのお宅には、電動カートを置く場所は十分にありますか？



(複数回答可)

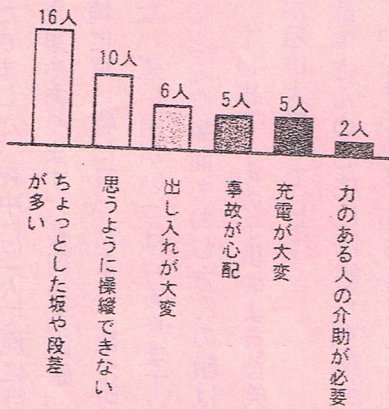


「はい」と答えた方の利用目的

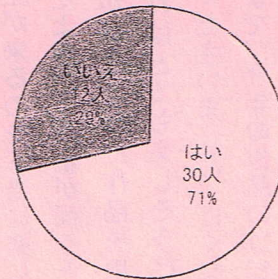


⑤ あなたは、電動カートを利用したいと思いますか？

(複数回答可)



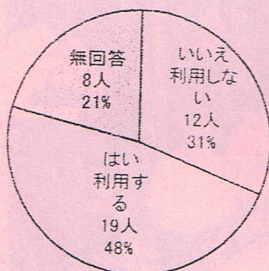
「はい」と答えた方の感じた不具合



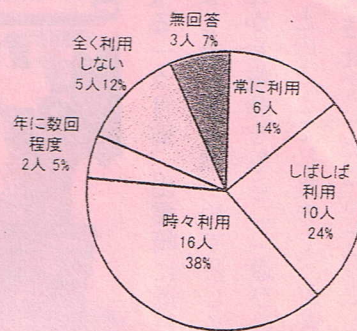
⑥ 電動カートを利用してみて不具合をみつけましたか？

貸出し料金希望平均額

百六十円



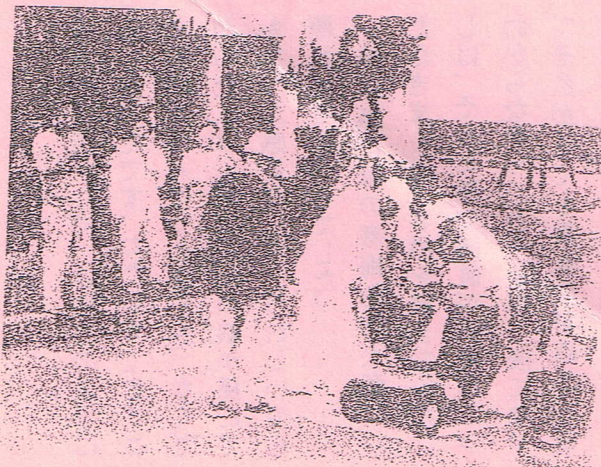
⑧ 電動カートが有料で貸し出されたら、あなたは利用しますか？



⑦ 電動カートが無料で貸し出されたら、あなたは利用しますか？

今後の実験について

既に、回覧でお知らせしておりますが、電動カートを今度は、期間を決めて、住民の皆さんから利用してもらい、今後の資料収集をしたいと思っています。ちよつと借りてみたいけど、道路との段差があつて、電動カートの出し入れができないという方は、事務局に相談いただければ、スロープ等の対応をしたいと思います。照れくさいなどと思わずに、ぜひ、ご協力をお願いします。



## 鈴木会長追憶

昨年十月に亡くなられた鈴木会長と東京芸術大学時代から交際を続けているお二人から次のような思い出が届きました。

今から十六年前、街並保存運動の一環として「妻入りの街並」を学生に描いてもらおうと東京芸大に話を持ちかけられて、日本画の大学院生が受ける事になりました。それ以来、鈴木さんご夫妻は毎年学生を快く迎えてくれました。

私は二年目から参加をさせて頂き、大変快く迎えてくれるおじさん、おばさんの優しさに触れて感激をしました。当時、豊吉さんは、まだ六十代になったばかりで若々しく、学生と一緒に海に潜って牡蠣を獲ったりしました。夜は、バーベキューをしながら酒盛りをしたりと付き合っ下さり、おばさんは美味しい手料理でもてなして下さいました。それ以来、私は、毎年お

二人を訪ね、仲人までしていただき、息子のようにお付き合いさせていただきました。夜中に二人で漁に行った事もあります。長岡の美術館・柏崎に買い物に行つたこと、数え切れない思い出がいっぱいあります。そのどんな場面もおじさんの顔は笑っています。あの子供のような笑顔が私は大好きでした。

鈴木さんのお宅には絶えず誰かがやってきていました。お二人は何時でも笑顔で、来る者は拒まず、誰にでも優しく、構える事のない自然体。そんなお人柄故でしょう。芸大のスケッチ旅行が十六年も続いたのもお二人のおかげです。そしておじさんは、学生が来るのを本当に楽しみにしていたようです。私が何うと何時も学生が描き上げた作品を出してきてそれはとても楽しそうに説明をしてくださいました。亡くなるぎりぎりまで、今年の作品のコピーを額装しようとしていたようです。

豊吉さんは私にとっては人生の灯台のような存在でした。この灯り

を絶やさないうちに生きて行きたいと思います。

藤島 墨久



亡くなる一ヶ月前、出雲崎に遊びに行きました。六月頃、めずらしく豊吉さんから電話をもらい「遊びにおいで」とのことでしたので、お言葉に甘えさせていただいたのでした。

その時、豊吉さんは、かっこいいサングラスとジーンズでダンディ

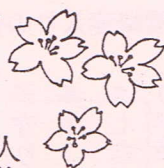
にきめて若々しく、いつものように優しくかったです。わたしを「よしこ」と名前で呼んでくれました。なんだかわたしは、豊吉さんの娘か孫にでもなった感じがして、うれしいやら照れくさいやらでした。

帰り際に越の寒梅をお土産にいただきました。お酒を飲まないわたしは、そのお酒の価値がいまひとつわからなかったのですが、後になってそれがとても貴重なお酒だと知りました。美味しいご飯、豊吉さん吉江さんの笑顔、優しい声。

いまだ甘えてばかりで、お礼をしようお礼をしようと思っっているうちに、豊吉さんは亡くなつてしまいました。「ありがとう」を言い足りない気持ちでいっぱいです。

豊吉さん、ありがとう。いただいた気持ち、今頃ちゃんとわかるようになりました。わたしもみんなも豊吉さんが大好きです。わたしの「ありがとう」がちゃんと天国の豊吉さんに届きますように。

菊池 佳子



## 妻入りの街(十八)

住吉町 磯野 猛

## 人物往来(三)

江戸時代から明治にかけて、出雲崎の廻船業は、繁昌しておりました。この廻船業者は、船で物を運ぶだけではなく、米や味噌、そして生活必需品などを店で仕入れて、船で遠くへ運び売り捌いて、利益をあげていました。この人たちは、廻船問屋といわれる店を構え、大勢の店員を雇い入れて、営業を手広くやっております。廻船問屋の帆船は、小回りのきく二十石積みから三百石積みほどの船が多く、営業規模に合う船を使って、北海道の江差を中心とした海産物を仕入れ、それを越後の米などと共に九州、四国、大阪方面へ積んで売り捌きました。その帰途には、九州からは焼物(食器類)、四国、大阪からは食用油、砂糖などを仕入れ、帰港途中の港へ売り捌きつつ出雲崎へ帰り、また越後の米や食品などを積み、今度は、北海道へ売

り捌きながら江差まで行き、海産物を仕入れ出雲崎へ帰って来ました。

このような船を「北前船」と呼びます。北前船は「船道役」と呼ばれる役人の差配の下で船鑑札を受け、積荷に対する税金を支払っておりました。入港税や積荷税を取り立てる「船道役」は大きな力を持っており、廻船の許可可や港湾の整備や「沖仲仕」といわれた荷揚げ、荷下ろしの人夫に対しても指導力をもっていました。

米など積み込む作業は、舁(はしけ)や伝馬船に五俵十俵と積み、沖合に停泊している百石とか二百石船まで運び、積み込み作業をやりました。

五百俵や千俵の米を運ぶためには大勢の沖仲仕たちが勇ましく働いて町も浜も海も賑わいました。まして幕府の御用米の積み込みともなれば、その数倍の賑わいでした。これらの作業なども「船道役」の差配の下で行われたようです。

この「船道役」という役職は、尼

瀬の山崎十兵衛という人の家が、江戸初期から明治初期まで代々役職を務めました。山崎家は文人が多く、役職の傍ら、諸国から出雲崎へ訪れる文人墨客と接し、暖かく迎え入れ、交わりました。

弥次さん喜多さんで著名な小説家「十返舎一九」も山崎家で草鞋をぬぎ、当主の山崎道也という人と交流を深めています。山崎家へ訪れた文人は、記念に書画作品を残して行きました。

出雲崎へ来た江戸の文人「亀田鵬齋」は「群書洞」の作品を残し、書聖と称せられた「巻菱湖」は「碎月」(波に写った月が揺れて岩にぶつかって砕けるような風情)という作品を残し、水原の代官「男谷燕齋」は「志善堂」の横額を贈り、亀田鵬齋の弟子「内藤鐘山」は「自然堂」の大額を書きました。また出雲崎代官「篠本彦次郎」も「志善堂」の大額を贈っています。このほかにも数えきれぬほどの書画作品が残され、この一部分がこの町に散在してお

ります。この山崎道也という人は、俳諧の道にも優れ、「釧雲泉」とも交わり、住吉町の浄邦寺住職「菅大峨」や良寛と親しかった「内藤方廬」らとも交わり、近郷近在の人たちに大きな影響を与えました。この時代廻船の運航に付けられる荷札を見ても驚きました。大阪や四国から送られる荷物の宛名の住所は、「雲浦」と書かれています。越中の船で運ばれる荷物も、大阪の船で運ばれる荷物も、宛先の地名住所は「雲浦」と書かれ名前が尼瀬の熊木屋だと荷札には「雲浦、熊木屋」で大阪や四国の荷物が他国の船で運ばれたのです。飛脚という使い走りですと「越後、出雲崎、橋屋」という宛名ですが、北前船で運ばれる荷物の宛名書きは、「雲浦、橋屋」だけで石井町の橋屋へ届きました。

このような、賑わいの町でしたから諸国から港町、宿場町、越後の中心的役割を果たした商業都市出雲崎へ訪れる人々が、多かった訳です。

## 今年度のおもしろ看板は

妻入りの街並をただ歩くだけでなく、町のおもしろい話、興味深い話を絵に描き、文を書いて看板にしたらもっと楽しく歩くことができるのでは？ということで今年度は四年目になります。

皆様方の目に触れているでしょう。この街並の所々に設置して楽しく歩いていただこう。昔こんな話があったのか、とおしゃべりの端緒となってくればとの趣旨で設置しております。

ここに、今年度のおもしろ看板を紹介いたしますので、実際に歩いて見ていただき、話の種にしていたければ幸いです。

### ◆第一話「子守り学級」

大正時代、出雲崎の小学校では、仕事の忙しい時期になると弟、妹の子守りのために学校を休む生徒も多かった。そこで学校の中で子守りをしながら勉強できるように「子守り学級」を作った。

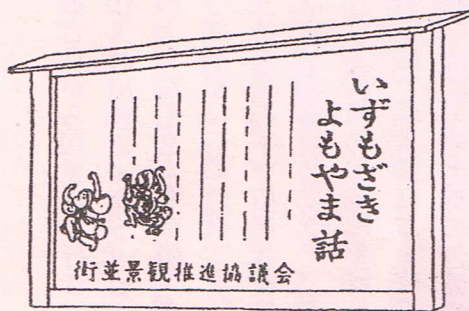
子守りをしながら学校へ行く生徒、その生徒の面倒を見る先生の様子を書きました。

### ◆第二話「蛸の供養」

磯見衆と呼ばれている漁師達が獲れた蛸を生きたまま釜茹でにするので、かわいそうだということで、春秋の彼岸に蛸の供養を毎年行っている。その蛸の供養の様子が書いてあります。

### ◆第三話「春の風」

「春のながせ（南風）」、「だしの風」、「たのもしや堂守り」という出雲崎の春の風に関係する話を書きました。



## 今年度のプランターは...

日頃、街並み修景にご協力をいただき、感謝申し上げます。

今回は、『杵南天』を植えました。古くから庭木として植栽され、花が少なくなる晩秋より黄色い花を道行く人にも楽しんでもらえそうです。草花用としての長方形木枠『車輪梅』、『赤はな常盤万作』を植え付けた正方形木枠、好評に後押しされ、作り続けて五年になりました。尼瀬から井鼻まで、ほぼ全域に行き渡りました。『美しい花を綺麗な鉢で』私達は、そんな思いで木枠の製作に携わってきました。少し汚れが見られる発泡スチロール箱などは、街並美化の面から如何なものか、そんなご意見も寄せられています。

今回で、木枠の製作を中止しますが、メンテナンスは継続します。破損、退色など申し出があれば、随時手直しをします。遠慮なく申し出てください。皆様の要望・意見・叱責、お聞かせ下さい。待っています。

## あとがき

皆様のご協力で、街並が少し変化しているのに、お気づきになりませんか。昨年「みよや」さんでは改築時に、二階の大正ロマン漂う洋館風の建物を保存され、この度、国の文化財審議会から登録有形文化財として、みごと指定（当町第一号）を受けました。また、尼瀬三区で築七十年を経た妻入りの町屋を借り、手作りリフォームでの喫茶店「星のまきば」も開店されました。さらに「出雲崎保育園」では、海野家のルーツである長野の名城、上田城をイメージされた園舎が完成いたしました。

以上いずれも、昔のままの佇まいを残したり、街並にマッチしたものを建てられたことに、私達は、深く感動しております。

昨今の高齢化や過疎を嘆くばかりでなく、もっと前向きな姿勢で進みたいものと思っています。

井鼻 渡辺 常侃

